

VP 付加について

堤 博一（都留文科大学）

1. Barriers と VP 付加

Chomsky (1986) は、以下の仮定群からなる障壁理論を提出した。移動によって関連づけられる範疇の連鎖の各連結 (α_i, α_{i+1}) に対して、 α_{i+1} は α_i に 1-下接していなければならない。これを下接の条件と呼ぶ。 α_{i+1} が α_i に n-下接するとは、 α_i を排斥する、 α_{i+1} に対する障壁が n 個以下であるということである。 α に対する障壁には、 α に対する阻止範疇を支配する範疇、すなわち継承障壁と、 α に対する IP を除く阻止範疇、すなわち固有障壁が含まれる。 α に対する阻止範疇とは、 α を支配する、L 標示されない範疇である。L 標示とは、語彙範疇による θ 統率であり、 θ 統率とは、ゼロレベル範疇である姉妹による θ 標示である。障壁理論は、間接疑問文、複雑名詞句、主語、付加部といった島からの移動によって生じる容認性の低下を、島ごとの程度差も含めて説明することを目指した。

その一方で、これらの仮定は、もっとも単純な WH 移動構文である (1) のような例の分析に対しても、非自明な含意を持つ。すなわち、目的語の WH 移動は VP への付加を伴わなければならない、という帰結である。上の仮定によれば、I は VP を L 標示しない。そのため、VP は、who の基底生成位置に対する阻止範疇であり、同時に固有障壁でもある。さらに、IP はこの阻止範疇である VP を支配するため、継承障壁となる。したがって、VP 補部位置から CP 指定部へ一足飛びに WH 移動が適用される (2) のような派生では、連結 (who, t) が 2-下接となり、島からの摘出に相当する容認性の低下が誤って予測されることになる。これに対し、VP 付加部を経由する二段階の移動を伴う (3) の派生では、連結 (who, t') と (t', t) がそれぞれ 0-下接の配置をなす。そのため、(1) の文法的ステータスを、その実際の容認性に即して正しく捉えることができる。

(1) who did John see?

(2) who did [_{IP} John I [_{VP} see t]]

(3) who did [_{IP} John I [_{VP} t' [_{VP} see t]]]

2. フェーズ理論における VP 付加

Barriers における VP 付加は、ミニマリスト・プログラム以降、フェーズ理論のもとで v*P 付加として再定式化される。Chomsky (2000) のフェーズ不可侵条件によれば、フェーズ主要部 H の補部領域は、当該フェーズの外側からの操作に対して直接アクセス可能ではなく、外部からアクセス可能なのはフェーズエッジに限られる。したがって、v*P がフェーズをなすならば、その内部に基底生成された目的語は、CP 領域へ移動する前に、いったん v*P エッジへ移動しなければならない。

従来のフェーズ理論では、WH 句や量化子が vP エッジを経由することにより、複数の経験的現象が説明されてきた。第一に、Fox (1999) が論じた束縛代名詞や条件 C に関わる再構築効果(4)は、WH 句が v*P エッジで解釈可能であることを示す。

(4) a. [Which (of the) paper(s) that he₁ wrote for Ms. Brown₂] did every student_i ___ get her₂ * to grade?

b. [Which (of the) paper(s) that he₁ wrote for Ms. Brown₂] did she₂ * get every student_i * to revise? (Fox (1999: 175))

第二に、QR による逆作用域読み(5)は、主語の v*P 内側エッジへの再構築と、目的語量化子の vP 外側エッジへの移動の組み合わせで得られると分析されてきた (Bruening (2001))。第三に、先行詞内削除 (Antecedent Contained Deletion, ACD) (6) では、削除箇所を含む量化子が QR によって v*P エッジへ移動することで、削除部の復元に伴う無限後退が回避される (Bruening (2001); Legate (2003))。

(5) A girl kissed every bride. [_{TP} a girl [_T [_{VP} every bride [_{VP} t [kissed t]]]]] (Bruening (2001: 256))

(6) Mary didn't [_{v*P} [anyone you did [_{v*P} e (=introduce John to t)]] [_{v*P} introduce John to t]]. (Legate (2003: 509))

このように、フェーズ理論における v*P 付加は、Barriers における VP 付加の後継であると同時に、フェーズ補部からの脱出、再構築、PL 応答、QR、ACD に対する説明装置として機能していた。

3. Box 理論における v*P 付加の限界

しかし、Chomsky (2024) の Box 理論を採用すると、v*P エッジへの移動が従来と同じ説明力を持つとは限らない。Box 理論では、外的併合によって命題的範疇の一部として導入された項は、内的併合を受けると節的範疇に属するようになり、「箱の中に隔離」される。この仮定のもとでは、wh 句および量化子は、基底生成位置から見て直近の vP エッジに退避した後、従来のフェーズ理論が想定していたような連続循環的移動を受けない。したがって、vP/CP エッジを順に経由していく移動は、Box 理論では維持されない。さらに、外項の基底生成位置は v*P 外側エッジ、内項の移動先は内側エッジと改められ、両者の構造関係が従来のフェーズ理論とは逆転する。

従来のフェーズ理論が再構築および PL 読みを説明できるのは、wh 句が直近の vP エッジにとどまらず、より高

い v^*P/CP エッジへ連続循環的に移動すると仮定していたからである。また、QR や ACD の分析では、 v^*P エッジへの QR が主語の基底生成位置を越えることが重要な役割を果たしていた。ところが Box 理論では、従来型の連続循環的移动が放棄されるだけでなく、 v^*P エッジにおける移動要素と主語の構造関係も反転する。そのため、たとえ v^*P エッジが移動先として用意されていても、それだけでは従来理論の経験的射程をカバーできない。Box 理論を採用するならば、従来 v^*P エッジへの（連続循環）移動によって説明されてきた現象を、別の仕方でも再分析する必要がある。本稿では、そのために Cooper (1983) の storage semantics を援用する。

4. 提案

本稿では、Box 理論におけるボックス化とアクセスを、それぞれ Cooper (1983) の保管 (storage) と回収 (retrieval) として解釈する。すなわち、内的併合を受けた要素は、意味計算の本流から一時的に除外され、元位置の変項と対応づけられて保管される。その後、適切な派生段階で回収されることにより、当該変項を束縛し、作用域関係が決定される。この提案では、外的併合は通常の間数適用として解釈される。一方、内的併合は、下位コピーを変項で置換し、移動した要素を保管する指令として解釈される。これにより、Box 理論の「内的併合を受けた項は命題的範疇から切り離される」という直観を、意味論的に明示化できる。

この分析により、まず QR は、量化句の移動先そのものではなく、保管された量子子がどの段階で回収されるかによって説明される。たとえば *someone loves everyone* において、 v^*P エッジへの内的併合によって *everyone* が保管され、CP 段階で *someone* より外側で回収されれば、逆作用域読みが得られる。ACD についても同様に、省略部の復元が保管実行後の表示を参照すると仮定すれば、無限後退を回避できる。省略部を含む量子子は、narrow syntax では省略の先行詞に内包される。しかし、量子子の保管が実行され、変項のみが残された表示を先行詞として省略部が復元されるならば、復元対象となる領域は当該量子子を含まない。したがって、復元された省略部が同じ量子子を再び含み込むことはなく、無限後退は生じない。

5. 再構築の分析

問題は再構築である。ボックス化／アクセスを保管／回収では、回収された保管要素は保管庫から抹消される。すなわち、同一対象を複数回にわたって回収することは、理論上不可能である。しかし、WH 句の再構築現象 (4) では、一つの WH 句が複数の位置、すなわち作用域が決定される位置と束縛関係が評価される位置で、解釈に関与しているように見える。では、複数回の回収とも取れるこの効果を、保管／回収分析のもとでどのように実装できるだろうか。

この問題に対して、本稿では Chomsky (1993) の WH 句の分析を利用する。すなわち、which boy のような WH 句を演算子部 *which x* と、変項を含む制限部 *x a boy* に分解する。この分解は、{which, NP} に *which* の内的併合を施し、{which, {which, NP}} を形成することで実現される。この内的併合により、演算子 *which* がまず保管され、制限部 {x, NP} が残される。これがさらに内的併合して保管されることで、演算子と制限部が独立に保管される。これにより、演算子部と制限部がそれぞれ独立に回収の対象となる。制限部は、束縛関係が評価される中間位置で回収される。一方、演算子部は、WH 句の作用域が決定される位置で回収される。これにより、再構築効果を導出できる。

重要なのは、この分析において、各々の保管要素はそれぞれ一度しか回収されていないという点である。一つの WH 句が二度回収されているように見える効果は、実際には、WH 句内部の異なる部分が異なる段階で保管および回収を受けることによって生じる。したがって、保管／回収分析は、一回限りの回収という制約を維持したまま、再構築に見られる複数位置での解釈効果を扱うことができる。

参考文献

Bruening, Benjamin (2001) "QR Obeys Superiority: Frozen Scope and ACD," *Linguistic Inquiry* 32, 233-273. / Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA. / Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA. / Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step By Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA. / Chomsky, Noam (2024) "The Miracle Creed and SMT," *A Cartesian dream: A geometrical account of syntax in honor of Andrea Moro*, ed. by Matteo Greco and Davide Mocci, 17-40, Lingbuzz Press. / Cooper, Robin (1983) *Quantification and Syntactic Theory*, Reidel, Dordrecht. Fox, Danny (1999) "Reconstruction, binding theory, and the interpretation of chains," *Linguistic Inquiry* 30, 157-196. Legate, Julie Anne (2003) "Some Interface Properties of the Phase," *Linguistic Inquiry* 34, 506-515.